発展軌道に入った中国サッカーに関する研究

—中国サッカー改革発展総体方案に着目して—

スポーツビジネス研究領域

5017A008-6 王 翀

研究指導教員 平田 竹男 教授

1. 背景

19世紀に近代サッカーがイギリスで誕生し、世界中に広がった。19世紀末、中国に伝来し、イギリス植民地であった上海、威海、香港から全国に広がっていった。1895年、中国史上、上海史上初のサッカーチームである上海聖約翰サッカーチームが創立した。1936年、中国サッカー代表が中国史上初のオリンピックに参加を果たした。その後、戦争でサッカーを含め、すべてのスポーツ競技活動がほぼ停滞した。

1949年中華人民共和国の建国に伴い、スポーツの発展も新しい起点を迎えた。1955年1月、中国サッカー協会が創設された。1958年に台湾にあるサッカー協会が「チャイナ・ナショナル」という名前でFIFAに入ってきたため、中国側は不満に思い、FIFAから脱退した。1966年、文化大革命で全国リーグが中止され、1978年から再スタートした。1979年、台湾にあるサッカー協会が「チャイニーズ・タイペイ」に名前を変更し、1980年中国サッカー協会がFIFAに復帰した。

表1 CSLの変遷

1994年。	12チームで1部プロリーグ（甲Aリーグ）が発足。
1998年。	1997シーズン昇4降2、14チームへ。
2002年。	2001シーズン昇2降0、16チームへ。 だが、八百長事件で昇格した長春亜泰が失格することによって、15チームで行われた。
2003年。	2002シーズン昇降格制度一時中止、15チーム。
2004年。	「中国サッカー・スーパーリーグ（CSL）」と改めて再スタート。 初シーズンに12チーム（2003シーズンの3チームが降格）。
2005年。	2004シーズン昇2降0、14チームへ。
2006年。	2005シーズン昇2降0、16チームへ。 だが、シーズン前に四川冠城が解散することによって、15チームで行われた。
2007年。	2006シーズン昇2降1、16チームへ。 だが、シーズン前に上海申花と上海聯城が合併することによって、15チームで行われた。
2008年。	2007シーズン昇2降1、初16チームスタート。 だが、2008年10月に武漢光谷がリーグから中退し、15チームとなった。
2009年。	2008シーズン昇2降1、16チームへ。
2010年以降。	1部リーグ、16チーム 昇2降2。 2部リーグ、16チーム（2020年から18チームへ）昇2降2 2部の15位と3部の3位によるプレーオフ制度あり。 3部、32チーム（2019年から予定） 北区と南区に分け、レギュラーシーズンとポストシーズンが存在。

1992年6月、北京郊外の紅山口で中国サッカー協会の会議が行われた。「紅山口会議」で中国サッカーの改革の方向性を確立し、中国サッカーのプロ化の改革が始まった。1993年、中国サッカー協会が「中国サッカー事業十年発展計画（1993-2002）」を発表した。

1994年、12チームで1部プロサッカーリーグ（甲Aリーグ）が発足した。2018年シーズンに表1に示すように16チームとなっている。

1998年12月にFIFAランクで史上最高37位を記録してから、中国代表の成績は長らく低迷している。2002年日韓W杯以来、本大会だけでなく、最終予選にすら進出できなくなっている。2017年に15年ぶり2018ロシアFIFAワールドカップの最終予選に進出したが、1点差で本大会へのチャンスを逃した。

サッカー発展の社会的基盤は弱く、業界の雰囲気と競争秩序も混乱しており、成績が低下し続けていた。それに対して、中国のファンは未来の期待を抱き続け、中国サッカー協会に新たな施策か強化方針を求めている。ファンたちの望みに答えを応え、さらに中国指導者層が重視し、2015年にサッカーレベルの向上とサッカー産業の発展を目指すために、中国国務院（日本でいえば内閣府に相当する部門）は「中国足球改革発展総体方案（以下、方案）」を発表した。その後、行政機関、サッカー協会が相次いで中国サッカーの発展に関する政策を発表した。かつてない政府からの試みが中国サッカーの発展に影響を与えるようとしている。

先行研究ではZHANG, HE (2014)は1993年と2003年に頒布された「中国サッカー事業十年発展計画」が失敗したと報告している。その理由は国家体制とプロサッカー改革が相容れない、サッカーマネジメントモデルと運営方式の不完備、拝金主義とスポーツの道徳的精神の欠如、治績としている。Tien, Hsien ら(2017)は2008年北京オリンピック後の中国サッカーの発展は、政府、特に国家のリーダーである習近平の支配を受けている。習近平の3つワールドカップを達成するためには、スポーツシステム、教育システム、さらには産業部門までも、サッカーのレベルを上げることを重要な課題となっているようであるとしている。

しかし、国家・政府が頒布するサッカー方案をスポーツビジネスの観点で分析した研究は見当たらなかった。

2. 研究の目的

本研究は2015年3月に頒布した「中国サッカー改革発展総体方案」の内容に基づいた進捗状況を明らかにし、トリプルミッションの観点から中国サッカーの発展に与える影響を検討することを目的とする。

3. 研究方法

1. 「中国サッカー改革発展総体方案」は前文+11項目の内容で構成されており、11項目は、さらに50の条項に分かれている。そこで本研究では、筆者によって、構造改革、普及推進、マッチメイク、代表強化、ユース育成、クラブ運営、審判・指導者、ビジネスの8つの項目に集約し、インターネット、記事および先行研究等の文献調査により進捗状況を把握する。

2. 平田竹男が提唱するスポーツビジネスの「トリプルミッションモデル」を用いて、「中国サッカー改革発展総体方案」の分析を行う。

4. 研究結果

方案は前文+11項目の内容で構成されており、11項目は、さらに50の条項に分かれている。主な内容として、表2にある通り、8つ項目に集約することができた。

表2 「方案」における主な内容

項目	説明
構造改革	中国サッカー協会を調整し、再建する。
普及推進	学校サッカーと社会サッカーの普及を推進する。施設数を増加する。
マッチメイク	サッカー競技大会の体系とプロリーグの体制を改善する。
代表強化	代表チームの改革発展を推し進める。
ユース育成	青少年のサッカー人材の規模の拡大を推進する。
クラブ運営	プロサッカークラブの運営を改革・改善する。
審判・指導者	サッカー人材の育成とアスリートのセカンドキャリア支援を強化する。
ビジネス	投資システムを改善する。サッカー産業規模を拡大する。

本方案において、主な2つの方向性があった。まず、サッカー協会を調整・改革した上で、特色を持つサッカーマネジメントモデル創出することである。内部構造には、行政機関から分離し、社団法人として位置付けた。国家体育総局との関係を整理し、自主権を持つようにしたが、サッカー協会における党の委員会は国家体育総局の党組織の指導を受けた。外部から独立社団法人の資格を持った中国プロサッカーの理事会を創設する。サッカー協会の業務を監督する。

次に、エリート教育から、誰でもが「する」ことのできる大衆サッカーへ転向である。特に学校教育における普及に重視し、サッカーを体育授業内容として扱い、サッカーを行える環境を整える。社会においてもサッカー場を積極的に建設し、草の根とプロサッカーがお互いに促し合うようにした。青少年サッカー人口の増加と社会サッカーの発展を通じて、サッカーの認知度を向上させ、全体のサッカー発展につながった。

5. 考察

考察1 中国サッカー改革と政治

「方案」の頒布機関から、今回のサッカーへの改革は前例と違い、中国の中央政府機関である国務院が主導し、行政面から政治面に移ったと言える。

習近平が頻りに外交活動でサッカーのことに言及することで、サッカーを発展させる決意も外界に表示された。サッカーは世界で一番人気のスポーツとして、他のスポーツへの影響力を持ち、競技以上の価値を持っている。サッカーは国のソフトパワー、理想的

なライフスタイルと強い社会的魅力の象徴である。方案において、「体育強国を建設する重要な手段としてサッカーの改革を行う」という指導思想がある。つまり、サッカー改革を全国スポーツ体制の改革の突破口として位置付け、社会変革に新たな価値創出をするのが今回改革の本来の目的といえる。

考察2 「勝利」を目指すトリプルミッションの構築

「方案」の進捗状況から、中国サッカーの発展は「普及」と「資金」からアプローチし、「勝利」を目指し、改革を推進していると考えられる。

より普及させるには幼少期にサッカーに触れさせることが重要である。そのため、サッカーモデル校や育成システムの完備を通じて、逆台形モデルからも考えられるように幼少期にサッカーを体験させることで、たとえトップ選手になれないとしてもコーチや医者などサッカー関係者になってサッカー界に貢献し、「勝利」につながる。そして、「勝利」を収めることで、メディアでの露出が増え、注目を集めると予測できる。これによって、選手の知名度を向上、競技の認知度を上げ、人々の関心をサッカーに向けさせ、「普及」がより進むことが考えられる。

盛んな国内市場と海外進出が「資金」面として、絶大な支援を提供している。有力な外国人選手と監督をリーグに招き、競技レベルを向上させる一方で、国内選手も鍛えられている。さらに、国家トレセンの完備と海外クラブの育成システムが各世代の選手に育成・強化を行うことができ、「勝利」の実現につながると考えられる。同時に「勝利」が達成できることで、全体サッカー市場価値が倍増し、放映権料の増加、スポンサー契約も入ってくるようになり「資金」のミッションが達成されるという流れが起り得る。

最後、「勝利」とは、単に勝つことではなく、最後まで求めること、「勝利」を追求するプロセスで多くのものが得られること等を含む概念である。そのため、「理念」に基づいた管理機関の改革といった手段も含み、マッチメイク、代表強化およびクラブ運営を通じて「勝利」ための環境作りも大事である。サッカーを本格的に改革してから、わずか3年にすぎない。代表チームの成績にあまり効果が出ていないことも意外なことではない。しかし、方向性がみえ、世界のサッカー潮流と同じ道を進んでいるのは否定できない。したがって、2022年もしくは2026年のFIFAワールドカップで中国代表は好成績を残せるのかを期待したい。

6. 結論

本研究では「中国サッカー改革発展総体方案」の内容と進捗状況をまとめた。トリプルミッションの観点から中国サッカーは「普及」と「資金」に力点を置き、「勝利」への好循環を起こしていた。「方案」の頒布が中国サッカーの発展を軌道に乗せたと結論づける。